

鉄元堂尚茂の変わった画題「小人国図」しょうじんこく 目貫の生まれた背景

はじめに

今回、紹介する目貫は江戸時代後期に一宮長常、大月光興と並んで京都の三名工と謳うたわれた鉄元堂尚茂が得意の鉄地に彫った作品で、表目貫に鶴、裏目貫に中国人風の群衆を彫ったものである。この画題の元になる絵は『和漢三才図会』わかんさんさいずえに所載されている「小人国」の図で、鶴に掠さらわれまいとして小人が集団になつて警戒している図である。このような変わった画題を作品とした背景を考えてみたい。

1. 鉄元堂尚茂「小人国図」目貫と小人国のこと

この画題の原典である『和漢三才図会』巻二の「外夷人物巻之十四」に所載の画とその説明は次の通りである。なお東洋文庫（平凡社刊）に全巻が現代文に訳注されており、その一冊の『和漢三才図会3―寺島良安』（島田勇雄、竹島淳夫、樋口元巳訳注）から引用する。



伊藤 三平

『三才図会』に「東方に小人国があり、蟬せみという。身長は九寸。海鶴は彼等に遇えば彼等を呑み込む。それで外出するときは群行する」（人物十四巻）とある。『広博物志』には次のようにいう。魏の時代、河間の王子の元の家の庭前に、雨中、少児八、九人が天から墜ちてきた。身長は六、七寸ほどであった。彼等は自分達の家は河東（山西省西部）の南にあるが、風に吹き飛ばされてここに來たのである、といった、と。

この言は大へん納得できるものである。（筆者注、『三才図会』は明時代の百科全書で1607年に成る。『和漢三才図会』の原典の一つ。『広博物志』も明時代の書で、古今の書物などから不思議な話を集めたもの）

尚茂は、原図よりも鶴はリアルに彫り、小人達には中国人風の衣装を着せて、上空を見上げて怯おびえて逃げ惑まどっているように生き生きと彫り上げています。鉄地だが、金の短冊銘を入れており、吟味して製作した作品である。

2. 鉄元堂尚茂

鉄元堂尚茂（姓は岡本、初銘は敏行、後に正樂）は、京都の金工で鉄屋伝兵衛の弟子と伝わる。天明元（1781）年に刊行された『装剣奇賞』（稲葉通龍著）に「近代独歩ともいふべき名工なり、第一鉄物を治すこと、古来其右に出るものなし、（中略）惜しいかな、安永九年、にはかに没せり、しかれども其の名今に高く、其の作ますます賞玩せり」と評価されている。

長常より2歳年上とも伝わり、この説をとると長常は享保6（1721）→天明6（1786）年の生涯であるので、尚茂は享保4（1719）→安永9（1780）年となる。二代鉄元堂尚房も正樂を名乗っており、銘字での区別に課題は残っている。

金工には珍しく鉄地を使って巧みに彫ったものも多いが、色金を使用した作品もあり、色金の方が細工もしやすく、見栄えもする為か更に上手に見える。

3. 尚茂作品に見られる異国への関心

現存する鉄元堂作品には、この「小人国」だけでなく『和漢三才図会』を原典とすると考えられる画題が目につく。「手長・足長図」と称される手と足が、それぞれに長い人物を彫った作品もあるが、これは同書の「長臂（手長）」と「長脚（足長）」として所載されている絵が元になっている。

「韃靼人」を彫り上げた鐔は、鉄元堂の代表作として手持ちの刀装具関係諸書の範囲だけでも5枚ほどの図版を確認している（二代正樂の作品もある）。それぞれに異国があるので「韃靼人」以外の可能性もある。何しろ『和漢三才図会』には「異国人物」として韃靼も含めて11図、「外夷人物」として177図も所載されているのである。



「韃靼人図」鐔 岡本敏行（金象嵌印銘）
『刀装具鑑賞画題事典』（福士繁雄著）より

4. 『和漢三才図会』や

異国事情を知る書籍

『和漢三才図会』は尚茂が活躍する約50年前の正徳2（1712）年に、大坂城の御城入医師の寺島良安が上梓した著作である。日本式の漢文で書かれており、105巻81冊の大作である。漢方医療に関する知識の習得に役立つだけでなく、天文、地理、植物、動物、魚類、各種道具類まで及ぶ百科事典のような書物で図も多い。書名は、中国の明代の王圻の著作『三才図会』に典拠して、日本のことも取り入れていることによる。なお、三才とは書物全体を天、人、地の三部に分けたことを意味している。

挿図はともかくとして漢文であり、読みやすい本ではない。なお井原西鶴、近松門左衛門などの元禄出版文化が花開いた大坂では、大岡春卜、橘守国という絵師が庶民でも読める多くの絵入版本に腕を振るっている。その中に享保4（1719）年に刊行された全15巻の『唐土訓蒙圖彙』（平住周道著）があり、それに橘守国が図版を画いており、そこに「長臂長脚」の絵があることを確認している。私が確認できていない他の絵入版本に小人国や韃靼人の図版がある可能性もあり、尚茂や目貫の注文主がこれらを参考にした可能性もある。なお韃靼人については、江戸時代前期に越前から出航し、難破した漁民の聞き書きによる『韃靼物語』があるが、これは鎖国下では非公式な書物として版行されておらず、写本として好事家（もの好きな人）に知られていただけである。

尚茂の人物表現好き

『解体新書』の訳出を行っている。

に感じる。

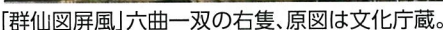
7. 曾我蕭白との共通性

与謝蕪村は48歳、池大雅は41歳である。
のおお

家、寺僧にまで広がっている。

とを記しておきたい。

れている。



— 9 —

そして、このような異国趣味は、当時の寺子屋教育や挿絵本などを通して庶民層まで普及していたとある。前述した大岡春卜、橘守国の絵入版本のことだろう。『新潮日本美術文庫13 円山応挙』（星野鈴著）の「楊貴妃図」の解説に「一八世紀半ばの京都は大変な中国ブームの時代でした。庶民の日常会話の中にすら唐音が飛び出し、読み物として『三国志』などが好まれてました」とある。

おわりに

尚茂の異国趣味、それも『和漢三才図会』からの典故ということでは書き進んだが、調べていくと、18世紀京都画壇に触れざるを得なくなつた。特に若冲、蕭白、やや時代が下がるが長澤蘆雪は近年「奇想」の画家として声価が高まっている。「その「奇想」が生まれてくるゆえんは、当時の京都の文化界を覆っていた「自由」の精神であつた」（『もっと知りたい曾我蕭白 生涯と作品』狩野博幸著）とある。この潮流に尚茂も、尚茂作品の愛好者も影響を受けていたと思う。今後とも詰めていきたい。